

中学生の部



福島県郡山市立安積第二中学校

一年 安齋^{あんざい} 真^ま 央^{ひろ}

交通安全家族会議

私にとつての交通安全を考えてみると、自転車を運転する時には「ヘルメットを着用する」、「左側を走行する」など主に、自転車に乗る側の視点での交通安全を一番に考えた。その理由は、中学生になって自転車通学になったからだと思う。では、他の人はどうだろうかと思つた私は、家族と交通安全とは何かについて会議をすることにした。

まず初めに、小学生の妹が考える交通安全は、「信号を守る」、「横断歩道では手を挙げて横断する」など、主に歩行者側の視点での意見が多かつた。

次に、母が考える交通安全は、「かもしれない運転をす
る」、「急のつく運転をしない」、「早めにライトを点灯する」

など主に、車の運転者としての視点での意見が多かつた。

次に、父が考える交通安全は、「出掛けるときは、早めに出発するなど時間に余裕をもつた行動をする」、「夜間出歩く時は、夜光反射材を着用する」との意見であつた。また、人それぞれの交通安全だけではなく、車の自動ブレーキ機能などの企業努力も交通事故防止に繋がっているなどと父は話していた。

このことから分かる通り、それぞれの年齢や立場によつて考える交通安全があることが分かつた。また、そのどれもが守らなければならない交通安全だと思ふ。

では、なぜ交通事故は起るのか。福島県内の交通事故件数を調べてみると、令和四年中に二千七百件を超える人身事故が発生していることが分かつた。これでも減少傾向にあるようだが、なぜこんなにも交通事故が発生するのだろうか。

それについても家族で会議をした。その中には、「疲れや調子の乱れ、それによる注意力の低下が原因なのではないか」、「前は大丈夫だったからという経験で基本が崩れたのではないか」、「自己中心的な考えで行動していたのではないか」、「そもそも交通安全に対するモラルがなく、交通

ルールを守っていない人がいるのではないか」などの意見があった。

この時、ふと私を感じたことがある。それは、大人は事故を起こさないという加害者の視点、子供は事故にあわないという被害者の視点で交通安全を考えていると感じた。それぞれ交通安全のことを考えているのに、まったく逆の視点から考えていると感じた。また、交通事故は、自動車と歩行者の事故だけではなく、自転車と歩行者の事故も考えられることが分かった。それを考えると、自転車通学をしている私も交通事故の加害者になる可能性があることが分かった。今まで、事故にあわないための交通安全を考えていたが、これからは、加害者側の視点での交通安全も意識しなければならぬと感じた。

この会議を通して、私が思う最大の交通安全は、全員が加害者側と被害者側の視点で交通安全を考えることだ。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

岡山県倉敷市立真備東中学校

弟の交通安全

一年 仁沢^{にざわ} ひなた

交通には、さまざまなきまりがあります。例えば「赤信号は止まれ」「青信号は進め」「横断歩道は左右を確認してわたる」など、他にもたくさんあります。私たちにとってこのきまりを理解することは簡単ですが、それを理解するのが難しい人はたくさんいると思います。

私の弟は発達障害という病気をかかえています。そのため、買い物などに行った際に、駐車場についたら周りを見ずに飛び出したり、信号を見ずに横断歩道をわたろうとしたりするなど、過去にもこのようなことが何度もありました。今でもまれにこのようなことが見られます。その度に危ないことを両親が説明したり、車をおりる

前には声をかけたり、手をつないだりするなど家族みんなで注意してきました。ですが、弟は言われた時には飛び出したりしないのですが、次の日には忘れてしまい危ない行動をしてしまうことがあります。家族は弟のことで不安になることが多いと感じています。はじめに言ったように私たちが簡単と思っている交通のきまりは、弟にとつては理解するのが難しいのです。そこで私は、信号の色などを理解するのが難しい子たちは何で危ないことが分かるようになるのか考えてみました。横断歩道にある音響信号機のメロディを「わたつていいよ」や「止まってね」など、簡単な言葉にするといいと思いました。他にも、横断歩道の信号の標識を丸やばつにすると、弟のように障害をかかえている人や、小さい子も分かりやすいと思いました。私の家では電気のスイッチにばつのシールを付けていることで、弟もその電気のスイッチをさわらなくなつたので、信号機も効果はあると思います。この横断歩道のアイデアをお母さんに話したところ、信号機の変更などの相談は警察署の交通課が担当していることを初めて知りました。その時に、信号機の長さやあたらしく標識を作ってもらいたいなど、色々な相談を

できることも知りました。

今回は、弟のことからいろいろアイディアを考えてみたけれど、相談し実現するには、地域みんなの協力が必要だと思えます。弟のように障害をかかえている人たちや小さい子、お年よりの方のため、運転する人もしない人も地域のみんなの協力や理解をもっと深めることが大切だと私は思います。いつか、私のアイディアが実現されるといいですね。それまでは、今まで通り弟に声がけをしつかりし弟がけがをしないように注意していきたいと思えます。

山口県学校法人萩光塩学院中学校

二年 明賀 洸士郎

運転免許証返納大作戦

今年祖父が自動車の免許証を返納しました。

祖父は今年八一歳になりました。腰が悪く手術してからは、長く歩いたりするのも難しくなりました。

自分のハウスに行くのも軽トラに乗り、車は足代わりとなっていました。

車というのはとても便利であり、楽にどこへでも連れて行ってくれます。運転している本人はしっかり運転できているつもりではあったように思います。

しかし、近所の人が見たりしても危ない運転であったようでした。ちょっとミラーが当たった時も近所さんだから許してくれましたが、自分ではなんともいいように解釈し反省することもなかったと聞きました。

同居の子供（母の姉）がいくら返納をすすめても首を縦に振らず困って、私の母へ相談の電話がありました。

そこで、私の母やいとこ（祖父の孫）も加わり免許証返納大作戦が始まりました。

祖父がどうして自動車の免許を返納しないのか、免許証を失って困ることなどを聞いてみました。

そうすると、自分が病院に行きたい時などに連れて行ってくれないと言うのです。祖父はせっかちで待たされるのが嫌いな性格のようです。しかし祖父の家はいちご農家であり、みんな忙しく働いておりすぐには対応することが出来ないとも言います。

お互いの言い分があることは分かりました。

しかし、他の人から見て危険と思うような運転で車に乗せるわけにはいきません。

一番怖いのは誰かを傷つけてしまうことです。交通事故でもおこしてしまえば、被害者やその家族はもちろんですが加害者とその家族も罪を背負って生きていくことになります。

祖父の言い分を聞いた上で、みんなで話し合いをしました。

祖父が行きたいところに行けなくて困るときは、同居の子供だけでなく、別居の子供、孫も時間があれば一緒に助けあうこと。

お互いが歩み寄れば、祖父もとうとう納得し免許証返納を決意してくれたようです。

今年四月に運転免許証を返納した祖父は家族の協力を得て、免許証がなくても生活できています。競艇のチケット売り場に連れて行ってもらったりもしています。

家族が忙しい時は、仕方なく待っているようですが。

そして何よりも同居であれ、別居であれ家族全員が安心を得ることができ、祖父にも優しくなれてきた気がするそうです。

免許証返納をためらっている方へ、家族としっかり話をしてみることをおすすめしたいです。

福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校

三年 伊賀崎望い が さ き のぞみ

命と安全のための輝き

習い事のピアノが終わると、外はもう薄暗くなっている。母の迎えの車に乗り家へ向かっている途中、部活帰りの同じ学校の子とよくすれ違う。ピアノ教室は少し遠い所なのですれ違う子達はほとんど自転車に乗っている。知っている子かな、と車の窓越しに見ても顔はほとんど分からない。でもヘルメットの後ろについている学年カラーの反射材シールが同級生なのか後輩達なのかを教えてくれる。

また、このピアノの帰りの薄暗い時間帯は犬の散歩やウォーキング、ランニングをしている人が多い。遠くからでもよく分かる。それはそういった人達のほとんどが

「反射材を身につけているからだ。反射材のタスキを付けていたり、ランニングウェアやシューズに反射材がついていたり。一度、全身反射材で出来た服を着た小型犬が横断歩道を一生懸命歩いているのを見た時は

「小さいけどゴールデンだね。」

と車内で母と二人、笑いながら渡り終えるのを待っていた事もあった。私は暗くなって外に出る機会がないのだが、明るい色の服装はともかく、目立つ反射材をつけるのは少し恥ずかしいな、と思っていた。

ある時のピアノの帰り道。その日はピアノの後に兄を駅まで迎えに行き、途中買い物をして帰った。外はすっかり真っ暗になっていた。母と兄と私三人、なにげない話をしながら家へと向かう交差点に差し掛かった時だった。

「うわあっ！」

と母と兄が突然大声を上げた。えっ、と思い驚いて周囲を見回すが、特に何もない。しかし、次の瞬間真っ黒な人が横断歩道のない道を横切っていく姿が街灯で照らし出された。暗闇から突然人の姿が浮き出てきた事に私は心臓が飛び出しそうな程驚いた。それは母も兄も同じ

だったようで、更に母は

「あの黒い服の人、一回車の前を渡ろうとしてた…。直前まで全く見えなかった…。」

と呆然とつぶやいた。よくバスの中などで

「夜は明るい色の服や反射材をつけましょう。」

と注意喚起の放送が流れているが、実際に夜間での暗い色の服がこんなにも車から見えにくいとは思ってもしなかった。もう少しで母は事故を起こしていたかもしれない。そんな考えが浮かんできて、その日二度目の恐怖が私の体中に襲いかかった。

今、私の通学カバンには反射材が使われているキーホルダーをつけている。兄達はそれぞれ反射材使用のカバンや部活用のランニングウェアを身につけている。あのピアノの日の経験から、反射材がどれだけ歩行者、運転者を守ってくれているかという事に私達家族は気付かされた。安全の近道は自分の存在を相手にも知ってもらう事。反射材は私達の命や安全を守るために今日も輝いてくれている。

優秀作

文部科学大臣賞

東京都港区立六本木中学校

二年 大久保 美海

かしんとゆだんが事故を生む

「交通事故」この言葉を皆さんは毎日テレビやインターネットで目にしたり聞いたたりしていませんか？世の中には毎日毎日、いろいろな事件や戦争、政治、天気、スポーツなどさまざまなニュースが私たちの元へ情報として伝えられています。その中で交通事故はほとんど毎日と言ってもいいほど伝えられるニュースです。

三年半前の二〇二〇年二月四日七時五十六分そんな毎日たくさんのニュースの中に私の弟が交通事故の被害者として出てしまいました。その日から私の弟はいなくなってしまうました。

私たちが小さいころから教わってきたルールを守って

いての被害でした。当時小学校四年生だった私はどうして教えられてきたルールを守っていたのに弟がこんな目にあわなくてはいけないのかの理由がずっとわからず、道を歩くのも自転車に乗って走るのも怖くて恐ろしくてしかたありません。

そんな思いを抱いていた私が中学校一年生の冬に、私の親や沢山の人たちが事故をなくすため、私の弟の被害を無駄にしないために事故があった場所に交通安全を祈願するモニュメントを制作することになり、怖くて恐ろしかった私もモニュメント制作に勇気を出して手伝いました。

モニュメント制作には本当に沢山の人が手伝ってくれました。弟の思い、こんな事故を無くしたいという思いがこんなにも沢山の人を動かしていることに私は気持ちを感じました。モザイクアート制作には弟の友人やクラスメイト、サツカーのチームメイトなど沢山の人が制作してくれて、私も弟への思いと事故が減る事を願ったメッセージなど、私に出来る限りをやりました。

そんな沢山の思いを見て、その時から私はこう思うようになれました。

「交通事故は一人がルールを守っていても起きてしまう。交通事故がなくなるには、車、バイク、自転車、歩行者すべての人がルールを守ってこそ防げるもの。私は弟が突然事故にあい被害者になってしまった事を伝えて二度とこんな事故が起こらないようにしないといい。」

私は人見知りするのでなかなかうまく伝えることが苦手ですが、これから頑張って交通事故の被害にあうとどれだけ辛く悲しいか伝えていければと思います。

交通事故は私たちが一歩学校の外に出たら一歩家を出たらいつ被害にあってもおかしくない事です。

被害にあわないようにするためにはどうしたらいいか？また自転車に乗るときにはもしかすると加害者になるかもしれない。そうならないようにまずみんながルールを守ってほしいと思います。

これから私たちは大人になり、数年後にはバイクや車の運転も出来るようになります。今までは事故にあう側だった私たちも加害者になってしまう事があります。

私は誰も被害者にも加害者にもなってほしくありません。みんながルールを守り交通事故がなくなる世の中に

なってほしいと心から願っています。

最後に、モニュメントに書かれたメッセージを皆さんに伝えます。

かしんとゆだんが事故を生む
そのいつしゅんが大事だよ
いつでも心にゆとりをもって

佳作

警察庁交通局長賞

香川県坂出市立東部中学校

我が家の「交通安全」

一年

朝倉 あさくら

茉 ま 央 お

いつもの通学路。私は、登校中、交差点に足をふみ入れた。その瞬間、建物の死角から進入してきた自動車が目の前に現れた。私はすぐに止まったが、その自動車は、進んでいるのか分からないくらいゆっくりとしたスピードで去っていった。

こんなことが起こったのは一度だけではない。私は毎回、不安と迷いに悩まされる。もし、自動車がきちんと止まってくれていたら、私はスムーズに渡ることができただろう。

このことをきっかけに、私は、歩行者や自動車に関するルールについて調べてみた。先程の状況に関連してい

たのは「歩行者優先」である。思い返せば、警察が駅前の横断歩道などで、交通取り締まりをしているところをよく目にしてきた。取り締まりの件数は、年々増加していると記事に掲載されている。

そこで私は、普段から自動車を運転している母に、登校中での出来事を話した。すると、母も自分の経験を話してくれた。実は母も一度、交通違反で検挙されたことがあった。その時は、腹が立ち、悔しい思いだったが、それ以降、いつも以上に安全運転を心がけるようになったそうだ。母も、危険な運転をしている人をよく見かけるらしい。

「全ての人が緊張感を持って、自動車を運転するようになったらいいね。」
と、母は話した。

私は、この話は自動車だけでなく、自転車を運転する時にも当てはまることに気がついた。最近、ヘルメット着用と自転車保険加入が義務づけられている。ヘルメットを着用することで、事故にあつたとしても、死亡率は低くなることが報告されている。さらに、保険に加入していれば事故をおこしてしまった場合、損害賠償金の一

部を補償してくれることを知った。

しかし、現実はそのようではない。ヘルメットを着用していない人は大勢いる。さらに、ながらスマホ、かさをさしながらの運転…。

「ちょっとくらいいいや」という気持ちでルールを甘くとらえることは、私もある。しかし、登校中での出来事、交通取り締まり、自転車のおそろしさを実感した私は、無自覚なまま大人への道を進んではだめだということに気づかされた。

家族で「交通安全」について話し合った。その結果、我が家の「交通安全」が決定した。「交通安全」とは、「事故にあうわけない」より「事故にあうかもしれない」と緊張感を持つこと。いつ何が起きるか分からないため、毎日正しく行動することが大切だと思う。

「交通ルール」を守ることは、自分や相手の命を守ること。一人ひとりが安全運転を意識して、誰もが安全で充実した生活を送る、そんな世の中になってほしい。私は、今までとは一味違う晴れ晴れとした思いで、交差点に足をふみ入れた。

埼玉県越谷市立南中学校

みんなを守るために…

一年 金子^{かねこ}由奈^{ゆな}

ある日、父の運転する車に乗っていると、父が「危ない」と言いました。何だろうと思つて見てみると高齢者が横断歩道の無い道を渡ろうとしているところでした。幸い、運転者の父も歩行者の高齢者も気付いたので事故にはなりませんでした。その時、私は「危なかったけど何もなくてよかった」と思うくらいでした。また他の日にも横断歩道が無いところを自転車で渡っている人がいました。左右を確認して渡ろうとしていましたが、反対側から来ていた車がクラクションを鳴らしていました。もし車や自転車が気付かずにそのまま進んでいたら大きな事故になっていたかもしれないと思い、たくさんの危険があることに改めて気付きました。

そこで、交通安全について家族で話し合うことにしました。まず、どんな場面があつてそこにはどんな危険があるのかあげてみました。「自転車に乗りながらイヤホ

ンで音楽などを聴いている人は、周りの音が聞こえないので車や人が近付いていることに気付かない」「歩道をはみ出して大勢で横に並んで歩いていると車のさまたげになつてぶつかる」「自転車ですごい速いスピードで走っていると歩行者や自転車の急な飛び出しに対応が間に合わない」「左右の確認が不十分で渡ろうとすると車が急に止まらないとぶつかる」「携帯などを見ながら歩いていると周囲の動きに気付かない」などの意見が出ました。父や母は運転するので運転者側の意見を出し、私や妹は歩行者側の意見を出しました。歩行者にとってはそれほど危ないと感じていないことが、運転者にとって危ないと感じることもあると知り、これからは注意して歩行しようと思いました。そして、運転者側も歩行者側もそれぞれが考えて行動しないと交通安全は成り立たないこと、また横断歩道が無いところを渡ったり、交通ルールを守らない人が運転者だけでなく歩行者にもいることが分かりました。「みんながやっているから」や「横断歩道まで面倒だし急いで渡れば大丈夫」など自分は大丈夫と過信して自分勝手な行動をとってしまったのだと思います。横断歩道の無いところを渡って、事故にあう割合

は20%だそうです。その割合を減らすにはどうするべきか、みんなで考えました。「車が急に曲がつてくるかもしれない」や「人が飛び出してくるかもしれない」というように「かもしれない」が大切なのだろうという話になりました。

家族で話し合うことでたくさんのがわかり、最初は他人事のように考えていたことがとても危ないことだと知りました。危ないと思うことを一人で考えていても自分しか守れないけれど、家族で話し危険を共有することで家族を守ることにもつながると思います。これからも交通安全のために危ない場面があれば話し合い、常に「かもしれない」を心に交通ルールを守っていききたいと思いました。

静岡県静岡市立城内中学校

二年 安倍あべ 夏希なつき

やめませんか？歩きスマホ

私に通っている塾の行く道には、赤から青までに変わる時間が長い信号機がある。周りを見渡すと学校帰りの自転車に乗った高校生や会社帰りの人が皆信号機の前に立っていて、スマホを見ているのである。信号機の色が青に変わった。しかし、その人達は青色に変わっても変わらず下を向いてスマホをのぞきながら信号を渡っていた。

この出来事の数ヶ月前、私は母に「歩きスマホは絶対にしたらだめ！」という忠告を受けていた。だが私は、スマホを見ながら信号を渡ってしまった。その日の夜、私が無気なくテレビを見ていると、歩きスマホをしている人が車が来ているのに気が付かず、そのまま渡ってしまったが、ギリギリで車にはねられないで済んだという映像を見た。そこで私はある事に気づいた。あの時、この人みたいに気付かず進んでいたらどうなっていたん

だろう？車が突然違う方向から来たら？この人は助かったけれど、もしも車が止まってくれなかったら？私は、そんなことを考えてしまっただけで、その日の夜はあまりよく眠れなかった。

次の日、母と歩きスマホについて話しあった。「歩きスマホってどうしてやってしまうのかな？」と私が問うと、母は「自分の欲にたえられないからじゃないのかな？」と答えた。緊急な場合でもメールを送ったりする時間は三十秒もかからない。だがSNSやコミュニケーションツールは、みればみるほどおもしろくなっていくから、そちらに集中して歩きスマホをしてしまおうと思うと母は付け足した。私も母の意見に激しく同意したので、私はもう絶対自分の欲にも負けないし、しっかり右左を見て信号を渡ろうと決意した。

次の塾の帰り私は、スマホをリュックの中に入れて、しっかりと前を向いて歩き出した。周りの人は相変わらずスマホを見ていたけれど、私はスマホを一度もさわらなかった。どうしてもあの日見た歩きスマホの人と車の映像がよみがえってくるのだ。

やったぞ！私は自分の欲に勝つたのだ！そんな気持ち

で右左をしつかり確認し、信号を渡りきることができた。

あれ以来私は歩きスマホを一度もしていない。私は、歩きスマホをやめることができたが、周りの人がやめない限りは、あまり意味がない。私はどうにかして歩きスマホの恐ろしさをいろんな人に知ってほしいと常々思っている。

徳島県立城ノ内中等教育学校

二年 森 一 翔

「思い合う心」をもって

小学校六年間、僕は徒歩通学だった。登校班の班長をしていた僕は、車や自転車の邪魔にならないよう、注意を払って先頭を歩いていた。昨年、中高一貫校に入学し、通学距離が片道八キロ程あるため主に車通学となった。小学校の時とは違い、運転する母の隣で座っているだけでよい。高校生になるまでに徐々に自転車通学へと切り替える約束だ。そして一年経った今、僕は中学二年生と

なり自転車に登校する機会が増えた。

気楽な車通学とは違い、再び注意を払っての登校となった。徒歩よりスピードの出る自転車では、より他の通行者と接触しないよう気をつけなければならぬ。歩行者が飛び出してこないか、車は曲がって来ていないか、地面に段差はないか気を張り詰めていた。だが自転車登校が増えるにつれ、慣れた道を無意識に走行している時もある。その危険を自覚し、もう一度気を引きしめなければならぬと最近思っていた。

そんな中、母の車が事故に巻き込まれた。その日は車での送迎だった。その帰り道、母が渋滞で停止しているところ「バンッ」という音の後、車を衝撃が襲ったそうだと確認された。と悟った母はバックミラーで後続車の様子を確かめ、すぐ横のガソリンスタンドへ車を移動させた。二台の車が続いて入ってきたことから、三台の玉突き事故だとわかったそう。各々が車を止め車外に出ると「大丈夫ですか？ケガはありませんか？」と声を掛け合ったそう。三台目の人が「すみません。私の不注意です。」と母たちに謝り、二台目の人は「もっと自分が車間距離を空けていれば…」と母に謝ったそう。母は車間距

離を十分とっていたため、前の車に追突せずに済んだ。母は僕の送迎に、他の二人は通勤によく使う道で起きた事故だった。

その話を母から聞いた時、まず母が無事でよかったと安心した。次に、慣れた道で家族が事故に遭ったことから、今までどこか他人事のように思っていた事故を身近に感じた。改めて自転車での登校時に気をつけなくてはと強く思った。同時に、お互いを気遣い合う温かい心を感じた。

このことを母に伝えると「事故が起きた時は負傷者救護が一番と義務付けられているんだよ。」と教えてくれた。また車間距離を十分とることも教習所で習うそうだった。それを聞き、僕は交通ルールとは自分の身を守るだけでなく、他人の身も守るものだとすることに気付いた。命を一番に考えることは人として当然だ。さらに母が車間距離をとっていないければ、前の車も巻き込んでいただろう。交通ルールを守ったことで四台の事故になることを防いだのだ。そして交通ルールとは、事故で悲しく苦しむ思いをする人をなくすため、思いやりの心を形にしたものではないかとも思った。

道路は歩行者や自転車、バイク、車など様々な人が利用している。交通手段は違うが、全員がお互いのことを思って通行することが大切だ。そのためには一方だけが「思いやる」のではなく、道を利用する全ての人が「思い合う」ことが必要である。これからも僕は様々な方法で道路を利用していく。その時は必ず「思い合う心」を忘れずに通行していきたい。

鹿児島県鹿児島大学教育学部附属中学校

三年 揚野望咲

私と自転車

私は、自転車に乗れない。幼い頃、友だちに教えてもらったことはあるが、どうしてもうまく乗ることができず、諦めてしまった。あれから何年も経ったが、今でも私が自転車に乗ることはない。しかし私の中で、自転車に対する見方は大きく変化した。そのきっかけは、二回の交通安全教室だった。

小学生のとき、交通安全教室で自転車について指導を受ける機会があった。自転車を持っている児童は、それを学校に持っていき、校庭で交通ルールや点検の仕方などを教えてもらおうという教室だった。同級生は、交差点や曲がり角などの場面に合わせて、考えて自転車を乗りこなしていた。一方、自転車に乗れない児童は、校庭の隅で見学をさせられた。私を含め、数人の児童はすることがなく、ただ同級生を眺めていることしかできなかった。普段自転車を利用している人たちにとってはとてもためになる時間だったはずだ。しかし、私たちがしたらどうだろう。当時の私は、正直、意味のない時間だと感じた。

それから数年が経ち、中学校に入学して、また交通安全教室を受ける機会があった。今度は、体育館に集まって全員でお話を聞いた。その時のテーマは、「自転車事故について」だった。テーマがテーマだったため、私は小学校での交通安全教室を思い出し、少しネガティブな気持ちで臨んでしまった。しかし、私が想像していた内容とは大きく違っていた。

「自転車事故は、自転車に乗る人だけでなく歩行者も気をつける必要がある」という説明から始まり、実際に

起きた事故の例や事故を防ぐために大切なことについての詳しいお話を聞いた。今まで、他人事と捉えて目を向けようとしてこなかった自転車事故。その多くが歩行者にも関連していると知り、大きな衝撃を受けた。車道を通る、ヘルメットを着用しなければならぬ……。自転車に乗る人だけが気をつけなければならないのだと思っていた。全くそんなことはなかった。私も、普段から注意するべきだったのだ。そのことに気づいてからは、あの小学校での交通安全教室でも、何か学びを得ることができたのではないかと考えるようになった。

これらの経験から、私は、もつと多くの人に「自転車事故は、歩行者も気をつけなければならない」ということを知ってもらい、安全意識に繋げてほしいと考えた。私のように、自転車について詳しく知らない人も多いはずだ。坂道での速度も、ブレーキが利くまでにかかる時間も、乗ったことがないから分からないのだ。

「私と自転車は関係ない」と思っている人も少なくないと思う。しかし、交通安全教室などを通して、自転車について知っておくことはとても大切だ。歩行者の意識も高めることが、自転車事故を減らすことに繋がると思う。

福島県いわき市立小名浜第二中学校

三年 遠藤 悠真

あつたらいいな「五つ目のマーク」

「運転中、ヒヤツとした経験はあるか？」あるネット記事によると、九十六パーセントの人が運転中ヒヤツとした経験があると回答している。僕も両親に聞いてみると、何度も危ない事はあつたと教えてくれた。

僕も車に乗っていた時、ヒヤツとした経験がある。それは今年の春休みに母と病院に行った帰り道のことだ。ある車が母の車を物凄いスピードで追い越そうとして、衝突しそうになったのだ。僕はこの時初めて命の危険を感じた。それと同時に、相手のドライバーに対し、強い怒りで頭に血が上る程だった。高速道路ではなく、普通の県道だ。どうせ信号で止まるのに、どうしてそこまでスピードを出して追い越そうとするのか。僕には全く理解出来ない。以前テレビのニュースで見た話だが、高速道路で悪質ドライバーが因縁をつけて暴力をふるったり、わざと車を停車させて後続車と追突事故が起きたり、

マナーの悪いドライバーによる事故は多い。ニュースや新聞で見えて知っていたつもりだが、いざ実際に自分が経験すると、段違いの怖さだ。

病院の帰り道、母が、

「世の中にはマナー違反やモラルに欠けている人、身勝手な人は沢山いる。お母さんみたいに運転が下手な人は特に気を付けて運転しなくちゃね。運転が苦手な人のマークがあれば良いのにな。」

と話していた。

現在、運転者が使うマークは四種類ある。一つ目は運転免許取得後、一年未満のドライバーが使う「初心者マーク」。二つ目は、七十歳以上の人が努力義務で付ける「高齢運転者マーク」。三つ目は、蝶の形状で耳の不自由な人の為の「聴覚障害者マーク」。四つ目は、身体が不自由な人の為の「身体障害者マーク」だ。これはクローバーの形状である。蝶の形状（聴覚障害者マーク）やクローバーのマーク（身体障害者マーク）はあまり見かけないので、もしかしたら知らない人もいるかもしれない。

僕の母の様に、運転が苦手な人は大勢いるだろう。そんな人達の為にも五つ目のマーク「運転未熟者マーク」

の様な物があつたらどうか。運転が苦手という事を周囲の車に知らせる事が出来、注意も促す事が出来る。「マーク」は、人に何かを伝える為のサインだと思う。「五つ目のマーク」は架空のマークだが近い将来、いつかこの「運転未熟者マーク」が実現すればとても嬉しい。

マークを付ける事で周知させるのも大事だが、一番はドライバーの心構えや思いやり、そして譲り合う気持ちが大切だ。これは交通社会以外でも、学校や会社にも共通する。僕も三年後には運転免許を取得する予定だ。その時は交通ルールを守り、思いやりと譲り合う気持ちを大切にすると大人になりたい。

徳島県立城ノ内中等教育学校

三年

里吉さとよし

悠馬はるま

父とヘルメット

僕の弟は、生まれていなかったかもしれない。

僕の父は、若い頃、僕がまだ母のお腹の中にいたとき

に、交通事故に遭ったそうだった。当時父は職場までバイクで通っており、事故当日も、バイクで家まで帰ろうとしていたという。父は前の車の後ろについて走行しており、交差点で、右折してきた車がそれに気づかずはね飛ばされてしまったらしい。父は骨折し、仕事を約六週間も休むほどの大怪我を負ってしまったという。いつも仕事熱心な父がそんなに長い期間休んだと聞くと、どれほどひどい怪我だったかが、ひしひしと伝わってくる。でも、父は死にはしなかった。ヘルメットが、飛ばされた父の頭を守ってくれたからだ。ヘルメットがなければ、僕には父親も弟もいなかっただろう。ヘルメットは、僕の家族を守ってくれたとても大切なものだ。

この事故の話を聞いて、僕は改めてヘルメットをつけるような心がけたいと思った。僕は自転車でも外出するとき、いつもヘルメットをつけている。でもそれは、以前までは、学校でつけるように言われていたからだ。今は万が一事故に遭っても頭を守れるように、命を守れるようにつけている。

二〇二三年四月から、ヘルメット着用が努力義務化された。その理由は、「流通科学大学」によると、自転車

事故で死亡した人の七割が、頭部に致命傷を負っていると言われているから、また、ヘルメットを着用していない場合の致死率は、着用時の二・三倍も高くなることからわかっているかららしい。しかし、この努力義務化で、ヘルメットをつけるようにしている、し始めたという人は、ほとんどいないだろう。理由として考えられるのは、努力義務化されてまだ浅いから、罰則がないから、つけるのが面倒くさいと考えている人が多いからといったことだ。とはいえ、国がこのまま何も行わず放置しているのは、人の気持ちは変わらず、今と状況はほとんど変わらないだろう。状況を変え、みんながヘルメットをつけるようにするためには、義務化が手っ取り早く、最も効果的だ。だが、僕はそれではダメだと思う。なぜなら、義務化すると、ヘルメット着用の理由が、「命を守るため」ではなく、「罰則を受けたくないから」になってしまふと感じるからだ。そういった理由を持つ人々は、警察など、監視し、罰則を受けさせる側がない状態では、ヘルメットをつけずに自転車で行くと考えられる。そうなれば、また重大な事故が起き、本末転倒だ。

だから、大事なのは、国に頼って国を理由に行動する

ことではなく、僕たち一人一人が、交通安全に興味をもつことだと思う。多くの人が、「自分は大丈夫」と過信しているのではないか。でも、交通事故は、意外と身近だ。僕の父が巻き込まれたように、いつ、どこで起こるか分からない。動画サイトを見るのに使っているその貴重な時間を、少しでも交通安全について知り、自分がどう行動すべきか考える時間に見てみてはどうだろうか。